

震災から4年 いま求められる事は…

阿波踊りレクが大好評! ～医学生らが被災地で奮闘～

2015年4月11日(土)、今年度初めての宮城県山元町被災地支援取り組みました。今回は大阪独自の取り組みとなり医学生2名、看護学生1名を含む総勢5名で行って来ました。

雨にも負けず

あいにくの雨でしたが、早朝6時過ぎに起床、早朝から訪ねた被災のシンボルとして保存が決まっている中浜小学校跡のそばの木にはメッセージが書かれた黄色いハンカチが風になびいていました。その後、「ちょっと力仕事をお願いしたい」という地域からの要望に応え、坂元老人いこいの家の近くにお住まいの方から餅つきに使う昔ながらの木臼と杵と両手で抱えるほどの大釜を戴き、みんなで車に乗せ朝から一仕事。

阿波踊りが大好評

定例のコミュニティー支援には、坂元老人いこいの家、ナガワ仮設の2チームに分かれて参加。被災後5年目はうつなどの症状が出やすいといいますが、いこいの家では自己紹介から被災時の体験談で話が盛り上がり、ナガワ仮設の方でも、健康チェックの時「よく眠れない」という方から「なにかに追いかけるような怖い夢を見るので、午前2時頃に寝てに午後4時半には起きるようにしている」というお話を聞きました。ナガワ仮設では大阪民医連奨学生で徳島出身のKさん(香川大学6年)がレクリエーションに用意した「阿波踊り」が大好評で、10月に行われる「秋祭り」に「採用」されることに。

期待の大きさを実感

地域の方から「県南医療生協さんと医学生の取り組みにはとても励まされている。やめないうで続けて欲しい。」と口々にいわれ、被災の体験が未だに被災者の心と身体に与えている影響と私達への期待の大きさを思いました。

午後からは牛橋地区の復興支援住宅の町会長さんらと懇談。懇談の席では、欄間につかまりながら首まで水に浸かりながら助けをまった話や、プカプカ浮いたベッドがそのまま水が引いて床に落ち、その上で寝たなど生々しい体験談が語られました。参加した学生からは、「人と人のつながりが復興や人々の精神的な支え。心の傷は想像以上に大きかった」「医師になる前に感じたこの感情を大切にしたい。できれば来年国試に合格したらもう一度来たい」「黄色いハンカチに被災地にメッセージを書く運動を大阪に帰ったらやりたい。」などの感想が寄せられました。(コープおおさか病院医学生担当:佐貫)